

## 民国時代における日本研究雑誌の濫觴

——『黒潮』における日本認識

霍 耀林<sup>1</sup>

### はじめに

中国における日本研究史で、看過できない存在としては『中国人の日本研究史』（武安隆、熊達雲、1989年）、『中国的日本研究史』（李玉、2000年）、『中国的日本研究雑誌史』（林昶、2001年）であろう。この中で、中国における日本研究雑誌を取り扱い、初めて史的に論述したのは林昶氏の『中国的日本研究雑誌史』である。同書は中国における雑誌の沿革を遡り、初めての日本研究雑誌の誕生から今(現在)までの二つの高潮を主として論述してきた。

林昶によれば、中国における初めての日本研究雑誌は新文化運動の陣地として広く知られている『新青年』雑誌の出版社である上海群益書社により、1915年9月出版された不定期雑誌『日本潮』第一編である。<sup>2</sup>

しかし、『日本潮』が出版されたきっかけは、その序言によると、当時中国は「まな板の上の鯉のような状態に忍びないので、日本の新聞雑誌の中、我が国を謀る各種の言論を取り、海内の同胞に告げ、これを通して我国人が彼国の進行を窺われ、自衛の方法を図れる。」<sup>3</sup>というのである。これからも分かるように、『日本潮』の出版は日本の対華「二十一か条」交渉の直後に、中国人がよりよく日本侵略の実質を認識するため、編集者は心を込めて日本の新聞雑誌で我が国を図る言論を選んで、訳して編集出版したのである。これからみると、『日本潮』は清末以来中国人が日本をモデルにして、各種言論を訳して勉強するという手段が続いていることがわかる。『日本潮』はまさにその典型的な代表として、初期の中国日本研究雑誌及びその編集者の思想傾向を反映した。

林昶はまた「肇始期の日本研究雑誌は各種日本人の観点や背景資料の提供を主として、ほとんどが翻訳された記事や時評などで、研究、考察の文章が少なく、この状況は20年代末30年代の初めごろまで続いた」<sup>4</sup>と指摘している。確かに、清末から民国初めにかけて、中国では日

---

<sup>1</sup> 霍耀林、中国井冈山大学中国共产革命精神与文化资源研究中心、外国語学院、日本同志社大学グローバルスタディーズ研究科博士後期課程在籍。

本研究は中国江西省高校人文社会科学重点研究基地招標項目『井冈山革命根拠地的外文史料翻訳及整理研究——以日本外交文書为中心』（No.JD16124）、中国国家留学基金の研究成果の一部である。

<sup>2</sup> 林昶『中国的日本研究雑誌史』（北京：世界知識出版社、2001）57。

<sup>3</sup> 同注2、本文引用文の日本語訳は全部筆者によるのである。

<sup>4</sup> 林昶『中国的日本研究雑誌史』64。

本人の観点や背景資料を翻訳した記事、時評などが少なくない。『日本潮』もその代表として、初期の日本研究の実情を反映していた。しかしながら、中国における本格的な日本研究の展開は20年代末30年代まで待つ必要はなく、実はその10年の前、即ち、1919年五四運動の時にはすでに始まった。この本格的な日本研究のスタートは『黒潮』を通して見てみたい。

『黒潮』雑誌は1919年8月上海で創刊され、太平洋学社による編集と言われたが、実際は陸友白という人が一人で編集したのである。『黒潮』は創刊当初も「本誌は私人の精神と経済を犠牲して全国平民の対日公開的研究言論機関を作ろう」<sup>5</sup>というスローガンを掲げ、日本対華の侵略政策に対して批判すると同時に国内の同胞を蘇って、日本を認識し、早く準備しようと呼びかけた。『黒潮』雑誌は専門的な日本研究をおこなっていると主張したが、第一巻の表紙には明確的に「日本研究」を表記しなかったのに対して、第二巻からの表紙に「日本研究」大々的に掲げた。『黒潮』は評論、専論（専門的な論説）、講演、随感、付録などのコラムがあり、日本の対華外交政策、政治、経済、軍事を重点にして多くの記事を掲載した。

筆者の今までの調査によると、『黒潮』は1919年8月に創刊してから、1920年8月まで、両巻五号を出版した。『黒潮』は月刊として公刊されたが、実際には、1920年7月の第二巻第一号の「緊要啓事」によると、「最近紙価が日増しに高くなり、経費調達が難しく、やむを得ず前に出刊した三号をもって暫く終わりとした」<sup>6</sup>これで1919年三号を出版したことが分かる。1920年の二号を加えれば、『黒潮』は全部で二巻五号であることが明らかになった。

『黒潮』はその資料収集がいろいろな困難があったせいか、残念ながら、今まで国内外この雑誌についての研究はまだ辞書での紹介という段階に止まっている。しかも、同誌は前後一巻三号が出版されたというのも通説である。『五四時期期刊紹介第三集』（中共中央馬克思、恩格斯、列寧、斯大林著作編訳局研究室編、1979年）、『中日関係辞典』（夏林根、董志正編、1991年）、『中国報刊辞典』（王桢林、朱漢国主編、1992年）の中で、『黒潮』について簡単な紹介が載せてあり、同誌が「全部三号がある」と称されている。<sup>7</sup>1993年出版された『中国現代報刊發展史』（倪延年、吳強編）の中にも同誌について「一つの国家問題研究を主としての専門刊行物」<sup>8</sup>と紹介した。民国時代の文献保護のため、中国国家図書館によって強力に推進して出版された『民国文献資料叢編』は、今三十種類、千冊以上に達し、国内外学界に大きな影響力を持っている。しかし、その中の『五四時期重要期刊彙編』<sup>9</sup>（2012年）にも『黒潮』三号のみ収録した。

<sup>5</sup> 「同志諸君公鑑」『黒潮』1(1919),1.

<sup>6</sup> 「緊要啓事」『黒潮』(1920)第二巻第一号、第二号表紙参照。

<sup>7</sup> 中共中央馬克思、恩格斯、列寧、斯大林著作編訳局研究室編『五四時期期刊紹介第三集』（北京：生活・読書・新知三聯書店出版、1979）365；夏林根、董志正編『中日関係辞典』（大連：大連出版社、1991）315；王桢林、朱漢国主編『中国報刊辞典』（太原：書海出版社、1992）88.

<sup>8</sup> 倪延年、吳強編『中国現代報刊發展史』（南京：南京大学出版社、1993）153.

<sup>9</sup> 李強 輯『五四重要期刊彙編』（北京：国家図書館出版社、2012）第十五冊 286—591.

前述の『中国人の日本研究史』(武安隆、熊達雲、1989年)、『中国的日本研究史』(李玉、2000年)、『中国的日本研究雑誌史』(林昶、2001年)などの著作も同誌については言及されていない。ゆえに、『黒潮』についての研究は中国の日本研究史、とりわけ民国時代における日本研究雑誌史の源流を遡るため重要な意義を持っているのみならず、民国時代の文献保護においても拾遺補欠という役割を果たすはずである。

では、『黒潮』という雑誌はいったいどのような雑誌だったのか、如何に日本研究をおこなっていたのか、執筆者はどんな人たちなのか、雑誌はどのような特色があるのか、当時の中国においていかなる存在であるかなど興味深いところである。そこで、本研究では『黒潮』の日本認識という側面からこれらの問題を明らかにしたいのである。

## 一、『黒潮』雑誌およびその周辺

### 1 『黒潮』雑誌創刊の背景

1898年(戊戌変法)から1907年までの間に、日中両国は教育及び文化の領域においてきわめて親密な相互交流が存在したことはよく指摘されている。<sup>10</sup>この親密な相互交流を通して、日本は中国及びアジア侵略の企てを隠した。1914年、第一次世界大戦が勃発した後、日本は日英同盟を口実に青島出兵した。この事件により、中国では輿論が沸騰した。人々は晴天の霹靂を聞いたごとく驚いて相語りに奔走していた。日本がかなり前から出兵の侵略を企んでいたことが分からなかった。<sup>11</sup>1915年、日本が民国北京政府に「二十一か条」を提出した。これにより、日本が侵略者であることが明らかになると同時に、中国各地の反発運動も巻き起こした。大規模な反発運動は二十一か条の調印を阻止できなかったが、これによって五・七(教育界では五・九)国恥日が中国の人々の記憶に刻まれた。

1919年、山東問題をめぐる日中間の交渉において、戦後公平的に裁判を待ち望んでいた中国の人々を失望させた。外交失敗の情報が国内に伝わりただちに強い反発を引き起こした。5月4日、北京大学を中心にする学生が請願運動を行い、間もなく、趙家楼に火を放ち、章宗祥を袋叩きにする事件に発展していった。この運動を支援するため、上海、山東、江蘇、浙江、山西、河北、湖南、江西、広東など各地の学界、商界などにより、請願運動が行われ、史上最大規模の反日運動所謂五四運動がはじまった。

以上のように、「二十一か条」をきっかけに、中国人の日本にたいするイメージが急速に垂悪化した。中国知識人たちは日本について認識しなければならなくなった。前述の『日本潮』の序言で指摘された「日本上下早くも我が国を凶る思いを持って、我が国情について巨であれ、

<sup>10</sup> ダグラス・レイノルズ (Douglas Reynolds) 『新改革命與日本：中国 1898—1912』(南京：江蘇人民出版社、2010) 5—25。戊戌変法から辛亥革命勃発にかけての十年間、所謂「ゴールドの十年」に、日本は中国現代化に持続的、建設的且つ客観的に非侵略的な役割を果たした。

<sup>11</sup> 惟一「掲破日人對我積年之陰謀及我國之覺悟」『正誼雜誌』(1) 1914,81-94。

細であれ、熟知している」<sup>12</sup>ように、当時日本の中国にたいする調査の詳しさと深さは人々に深い印象を残した。五四運動期に戴季陶は『我的日本観』で「日本は中国を解剖台の上に載せ、数百回、数千回と解剖し、また試験管に入れて何千回となく実験したのだ」<sup>13</sup>という、後に広く引用されるようになる名言も残した。これを通して当時国内では日本対華侵略政策によってにわかに日本研究の不足や必要性が唱えられた。言い換えれば、日本研究が当時中国にとって需要且つ必要になった。これが『黒潮』誕生の背景である。

## 2 創刊者陸友白及び太平洋学社

『黒潮』を論じるのに先立ち、まず創刊者の陸友白と太平洋学社について紹介したい。陸友白についてはほとんど不詳であるが、『黒潮』およびほかの関連資料のかすかな手がかりから彼の略歴をまとめておくと、以下のようなになる。

『黒潮』第一巻第一号の中に「太平洋人」という記者が書いた文章が掲載してあり、その中に「私の同郷姚明輝先生は故郷の人がみんな彼を怪物と呼ばれている」<sup>14</sup>という文がある。姚明輝は江蘇省嘉定人(今、上海嘉定)で、ここから記者の陸友白も江蘇省嘉定(今、上海嘉定)の出身が分かるはずである。また、1920年太平洋学社により出版された『白話文作法』<sup>15</sup>の著者署名「嘉定呂雲彪、陸友白、常熟戴渭清」からも、陸友白は嘉定の出身が確認できる。

『黒潮』第一巻第二号の「随感録」の中に「茲は同士数人が目下材料の窮迫に鑑み、随感録を加え、読者の興味を喚起するようという言いつけがあった。然し時間がぎりぎりのため、適当な文字が得難い、民国六年秋、(日本)から帰国した時の筆記数篇の古いものを探し出して充填した。」<sup>16</sup>ここから陸友白は民国六年(1917)秋日本から帰国したことがわかる。

1918年9月8日午前10時、中華職業学校は始業式が行われた。創立者黄炎培や学校主任顧樹森の挨拶の後、陸友白も教員代表として挨拶をした。<sup>17</sup>

1919年五四運動が勃発した後、七日目、「(上海)十六舗では寧波人戎鳴文がチラシを持って、各店舗に配ったことを第一区趙署長に見つけられた。ただちに逮捕された。後、商界愛国維持団中華職業学校代表王宗藩、唐華軒、陸友白、楊立人等が共に行って保釈を請求したが、許可された。<sup>18</sup>

以上から、陸友白が日本より帰国した後、中華職業学校で教員をしていたことが分かる。

<sup>12</sup> 同注2

<sup>13</sup> 戴季陶「我的日本観」『建設』1(1919),2.

<sup>14</sup> 記者「太平洋人」『黒潮』1(1919),53.

<sup>15</sup> 嘉定呂雲彪、陸友白、常熟戴渭清『白話文作法』(上海:太平洋学社,1920).

<sup>16</sup> 「随感録」『黒潮』2(1919),90.

<sup>17</sup> 唐威主編『中華職業学校校史:1918-2013』(上海:上海社会科学出版社,2013)13.

<sup>18</sup> 中国社会科学院近代史研究所『近代史資料』編訳室主編『五四愛国運動(下)』(北京:知識産権出版社,2013)456.

1919年8月、『黒潮』雑誌が太平洋学社の名により創刊された。

1920年4月、戴渭清、呂雲彪、陸友白三人の署名で編著した『白話文作法』が上海太平洋学社によって出版された。この本が出版された後、大人気で1921年11月は第五版、1928年8月第11版、1931年9月第17版、1933年9月第19版になった。同書は全部14章があり、白話文の意義、変遷、条件、種類、修辭、句読点法などを述べた。<sup>19</sup>

1923年、楊師曾、陸友白は『嘉定報』の編集を担当した。当報は月刊で、民国11年(1922)徐植仁、吳拯寰、陳逸如より発刊され、評論、光明之灯などのコラムを設けた。<sup>20</sup>

1927年4月12日、四・一二事件が発生した。27日、北伐軍東路軍前敵総指揮部は陸友白を嘉定県政治監察員兼党務指導員、民衆指導員に任命した。陸友白は県党部幹部を改正という名で臨時執行委員会を成立した。5月下旬、陸友白により『五卅市民大会準備大綱』を作って「跨党分子の打倒、蔣総司令の擁護」というスローガンを出した。<sup>21</sup>

1927年、陸友白編集した『不平等条約全集』は上海卿雲図書公司によって出版された。

1927年12月16日から、陸友白は『上海新聞』の經理兼主筆を担当した。<sup>22</sup>

1930年3月24日、国民党中央執行委員会第八十一次常務会議が行われた。出席者は中央執行委員胡漢民、陳果夫、譚延闓、于右任、孫科、主席は胡漢民。会議の決議の六番目は、前上海特別市党務指導委員会の呈により、党员陸友白は中央宣传部所編中国国民党宣言彙刊及び中山先生講演全集のサンプルを盗み取って、卿雲図書公司に定価発行を通して利益を求めた。この不法の事により、当該党员を六ヶ月党籍を除籍するという処分を決議した。<sup>23</sup>

以上が示したように、陸友白が編集した『孫文全集』(全七卷)1927年卿雲図書公司により出版された。ここまで『黒潮』の編集者陸友白について簡単に紹介したが、次に、太平洋学社について触れておきたい。

太平洋学社とは「大中華民國少数奮闘の青年で組織した専門的に東亜問題を研究する学社である」<sup>24</sup>と『黒潮』が掲げたように、当社は東亜問題を研究、太平洋主義を広げるため<sup>25</sup>設立された。学社の活動としては、明確な説明はないが、学社の広告や刊行物から推察すれば、主に以下のようにいえる。第一に、『黒潮』の編集出版。第二に、『日本研究小冊子』及び其の他諸本の編集出版。第三、対日研究の実力を蓄積、対日研究の同志を求めため、日本語の通信教

<sup>19</sup> 尹均生主編『中国写作学大辞典』(北京：中国檢察出版社,1998)第四卷1986.

<sup>20</sup> 上海市嘉定県志編纂委員会『嘉定県志』(上海：上海人民出版社,1992)908.

<sup>21</sup> 倪所安主編『嘉定県簡志』(北京：方志出版社,2008)卷四47.

<sup>22</sup> 沈雲龍主編,上海通志館編『上海通志館期刊(第二卷第一至四期)』(台湾：文海出版社,1977)230.

<sup>23</sup> 中華民國史事編集委員会『中華民國史事紀要(初稿)中華民國十九年一至三月』(台湾：国史館,1986)370.

<sup>24</sup> 補白『『日本研究』とは何か』『黒潮』1(1919),4.

<sup>25</sup> 「徵求社友」『黒潮』3(1919),3.

育を行われていた。

学社は人材や経済の実力を備え、刊行物の広く配布することにより社業の発展を図るため、社友制度を設けた。社友は普通社友と特別社友からなっている。普通社友は毎年社費銀一元を納めなければならない、代わりに、学社出版された定期出版物や対日研究の冊子は無料で受け取ることができる。特別社友は執筆するかあるいは経済に学社を支えることができる人に限られているが、実際的な行動がある時、学社の承認を得るうえ、専函によって懇請するのである。特別社友は学社の一切の出版物を無料で受け取る。<sup>26</sup>

入社の手続きとしては、特別社友も普通社友もすでに入社した社友の紹介を得て入社できる。ただし、遠隔地であったり、海外在住のため紹介者いない場合は当地の公私団体機関による紹介も可能である。(但僻處外省或海外在當地無人可為介紹者可由當地公私團體機關介紹之)すでに入社した社友は社友徵求隊員(特別社友は徵求隊長)として、随時学社に紹介状況を報告する。これに対して学社は毎月会計をし、毎年会計をして社友録も作り、紹介人数が多い社友に各種記念品を贈るのである。

『黒潮』第一巻第二号と第三号にそれぞれ普通社友録、特別社友録が発表されている。それによると、当号出版するまで、学社には普通社友八十人がいる。中には後中国現代研究で著名になる歴史学者顧頡剛の名前が見受けられるが、当時はまだ北京大学の学生である。特別社友は創刊者陸友白を含め、三十八人いた。中には、『黒潮』の執筆者である欧陽剛中、傅彦長、郭沫若、謝晉卿、楊立人、邵光典、陳懷恕、戴靄廬、錢江春、顧夢飛などが名を連ねている。また、当時の新聞界有力者の郭虞裳(『時事新報』主編)と範雲六(当時上海出版業トップ三の中の世界書局の編集所長)が特別社友として注目される。

以上が、『黒潮』創刊者の陸友白や太平洋学社について簡単に紹介したが、次に『黒潮』雑誌創刊の主旨及び編集理念も考察したい。

### 3 『黒潮』雑誌の主旨と編集理念

前述のように、『黒潮』創刊号で「同志諸君公鑑」(署名は陸友白)という発刊の辞にあたる記事がある。その中に「本誌は私人の精神と経済を犠牲して全国平民の対日公開的研究言論機関を作ろう」<sup>27</sup>という『黒潮』発刊の主旨が載せてある。全国平民ということばからも、同志は不偏不党、何れの党派にも属さず、平民の自由、公正な立場をとって日本問題を研究する方針を決めた。また、此处に言う「私人の精神と経済」とは、『黒潮』第二号「通訊」の「『黒潮』は私一人で任之、私之経済も先生知る也、今社中印刷、広告及び雑用、月二百元以上掛かる(中略)則私惟良心を問うて恥ない」<sup>28</sup>によると、『黒潮』雑誌は一人の経済で一人の良心を持って

<sup>26</sup> 同注 25

<sup>27</sup> 同注 5

<sup>28</sup> 「通訊」『黒潮』1(1919),4.

支えた実情であることが分かる。この人は編集及び創刊者の陸友白である。

この対日研究言論機関を作ろうとする理由という、「私たちがなぜ日本を研究するか、如何に研究するか」という記事によると、『黒潮』が日本問題を取り扱って研究する原因を以下のように述べた。

第一、日本には「支那研究」についての各種機関、集会、書籍、雑誌、新聞など多く存在している。中国に対する調査がとても詳しい。彼らの主義、方針及び言論は私たち中国人が耐え難い。ゆえに、私たちも対等的な集合があるべきで、彼らの荒唐無稽や寝言を暴くことができる一方、国内の同胞を蘇えって、日本の意図を見極めて、予め準備しておくべきである。第二、今後東アジアの問題は、いつでも、どんなことでも、中国と日本に密接な関係を持ち、適切な解決方法を研究するべきである。<sup>29</sup>

以上の二つの点から、太平洋学社が『黒潮』を創刊させたのは当時日本が中国に対する細かな調査と研究を深く感じ、その対応として日本国の中国研究を対応できる一方、国内同胞を目覚ませ、日本を理解、認識しようと狙っていたことが分かる。太平洋学社は特に、日中両国がお互いの隣邦にし、密接な関係を持っていると実感し、これで、必要な研究が無論、問題が出てきたら適当な解決方法を求めることも不可欠である。『黒潮』のこの日中両国関係の問題を解決する使命感は五四運動期の時代精神が反映できる一方、創刊者は国家や民族を關心する責任感も表した。

日本問題が幅広い範囲に及んでいるので、『黒潮』雑誌は編集する時も具体的な編集大綱も提出した。その大綱によると、『黒潮』の内容は評論、専論（専門論説）、文芸、記事などに限られた。また、評論は狭義的な愛国者の罵詈、感情の奴隷ではなく、必ず明確且つ確実だという要求を出した。専論は「素朴」、「系統ある」文章という要求のうえ、更に二つの「知らなければならぬ」という方針も提出した。即ち、日本の政治、経済、社会など政策民情及び中日両国の国交内幕は我が国と直接な関係を持ち、国民としては知らなければならぬ過去、現在、将来。また、直接な関係がなくても、国民としては知らなければならぬ日本の長所、短所、由来などである。<sup>30</sup>

この編集大綱から『黒潮』の中立的、客観的立場に基き、事実に沿って、系統がある科学的な研究を追求することが分かる。これらは編集者に対する要求ばかりではなく、これも『黒潮』の読者、ひいては全国民に対しての要求である。多くの人はいつも「平民、軍閥、中日親善、中日関係悪化などを口にしてはいるけど、中日の平民はどんな情況、軍閥はどんな情況、中日親善は如何、関係が悪化すると如何」<sup>31</sup> 確実な認識と理解がなければ、適切な解決方法も出さない。

<sup>29</sup> 「我們為什麼要研究日本？該怎樣去研究？」『黒潮』1(1919),20.

<sup>30</sup> 「黒潮月刊編集大綱」『黒潮』1(1919),23.

<sup>31</sup> 同注 29

## 4 『黒潮』雑誌のジャンル及び執筆者分析

『黒潮』雑誌の編集大綱で掲げた資料範囲は評論、専論、文芸、記事だけであるが、実際は、創刊号が「評論」、「専論」、「訳文」、「小説」、「付録」からなっている。第二号では「評論」、「専論」のほか、「講演」、「詩」、「筆記」また当時の『新青年』や『教育潮』など雑誌の中にとっても流行っている「通訊」、「随感録」というコラムが加わった。第三号ではさらに「記事」、「討論」を加えた。第二巻第一号では、戴季陶が『世界戦争與中国』（銭江春訳、太平洋学社出版）という訳書に書かれた「序文」も掲載された。

『黒潮』各号の基本構成は、各欄全部揃えるのではないが、「専論」だけが各号一貫して、掲載した文章の量も圧倒的に多いである。評論は第二巻第二号のほか、各号で多少文章を載せた。

『黒潮』の執筆者、その出身学校および同誌での発表文章数は以下の表のようになる。

『黒潮』雑誌執筆者の発表文章数と出身校統計

No.	執筆者	数量	出身学校	No.	執筆者	数量	出身学校
1	陸友白	16	日本留学	11	童有葛	1	早稲田大学・日本 国立桐生高等工業 専門学校
2	郭沫若	4	日本九州帝国大 学	12	黄振漢	1	不明
3	呂雲彪	3	嘉定初級師範学 校	13	陳懷恕	1	東京高等師範学校
4	戴季陶	3	日本法政大学	14	李子耕	1	不明
5	謝晉卿	2	日本留学	15	薛培元	1	東京帝国大学・シ カゴ大学イリノイ 大学
6	(顧) 夢飛	2	不明	16	傅彦長	1	米国、日本遊学
7	銭江春	2	杭州之江大学予 科	17	康白情	1	北京大学・カリフ ォルニア大学
8	戴靄廬	2	日本慶応大学	18	銭公胥	1	不明
9	馬伯援	2	日本留学	19	余日章 <sup>32</sup>	1	ハーバード大学修 士 上海聖約翰大学博

<sup>32</sup> 元は楊立人で記録、余日章の講演である。



							士
10	邵光典	2	北京大学	20	(歐陽) 剛中	1	日本東京高等師範 學校

以上の『黒潮』雑誌執筆者の発表文章数と出身学校の統計からみれば、まず、陸友白は雑誌の編集者として、掲載された文章の量が圧倒的に多い。ほかに、当時中国ではすでに名高い戴季陶も文章三篇を掲載したのもとても目立つ。次に、執筆者全体の学歴は高いことを疑わない。特に、日本留学した経験を持っている執筆者が多数を占めることが『黒潮』雑誌の特徴の一つとも言えるだろう。『黒潮』執筆者のこの高い学歴と日本留学したことがあるこそ、日本問題を研究する科学性と専門性が表せる。これによって、『黒潮』は専門的な日本研究雑誌としての性格もさらに鮮明であろう。

## 二、『黒潮』における日本認識：平民としての自覚

『黒潮』雑誌は専門的な日本研究が行われていると主張したが、実際にはこの「日本研究」の四つの文字が当時主に主述構造として使われていたが、名詞として使うのがまだ新しい使用方法で、当時の中国人は日本人がまた何かの研究をしようとして誤解されたことも出てきた。そこで、『黒潮』雑誌はわざわざ「日本研究は如何に理解するか」という文章を掲載して説明した。日本研究はもともと日本の名詞で、日本問題を研究するという意味である。日本人は支那問題を研究するのが支那研究と言う。中国国内も同じような使い方がある。例としてあげると、江蘇省は嘗て発刊した教育研究とか、ある機関により発刊した児童研究とか、これらは全部同じ使い方だと主張した。<sup>33</sup>

『黒潮』の日本研究内容は非常に豊富で、日本の対華外交、政治、経済、軍事、社会、宗教などが含まれているが、一般的に解明するのが当然無理で、同誌の創刊は五四運動期にあたり、五四運動は周知のように、日本帝国主義の中国侵略に反対する全国的な運動で、この運動の最中で発刊された『黒潮』は日本をどのように認識していたのかが興味深いところで、これを焦点にあてて明らかにしたい。

五四運動期、「平民」が新聞雑誌によく出て、非常に流行っている言葉となった。「第一次世界大戦終戦後、人々は民主に対して、理解が変化しつつあった。民主は単純な政治制度、国家形態ではなく、人間社会の各方面に貫いている普遍的な原則となった。これと関連する民主の精神が解放の精神と理解され、平民は官僚の圧迫を受けない、労働者は資本家の虐待を受けない、女子は男子に支配されないなどのように理解された。これで、民主は平民や大衆とかとして扱われるようになって、democracyも民主主義とか民権主義とかと訳さない代わりに、平民

<sup>33</sup> 「日本研究作何解」『黒潮』1(1919),4.

主義と訳されるようになった。」<sup>34</sup>

歐陽氏が指摘したように、民主に対するこの新しい理解によって「平民」が重視されるようになった。蔡元培(1868-1940)が掲げた「劳工神聖」<sup>35</sup>、陳独秀(1879-1942)が称された「働く人は一番有用で、一番貴重だ」<sup>36</sup>のようなスローガンはこの意を表した。この平民に対する重視が自然に平民主義思潮の勃興を引き起こした。『黒潮』はこの平民主義思潮の影響を受け、創刊当初も「全国平民対日公開的研究言論機関」というスローガンを出した。『黒潮』はまた「諸君が我々を賛助する誠意があれば、随時に教示を賜れ、我々はとても感激であるが、感謝とは言えない、諸君の賛助は至誠精神に於いて、自覚した人の責を尽したからである。」<sup>37</sup>と主張した。此処に注意すべきなのは『黒潮』が同誌を賛助する行為が自覚した人が至誠の精神に於いて、責を尽すということである。つまり、まずは同誌を賛助する人が自覚した、次に、その賛助行為が責を尽すという二つの点である。実はこの「自覚」という言葉も、五四運動期に「民主」「科学」に次いで、よく言及されていたもう一つのキーワードである。

「自覚」は自己の反省、自己意識の覚醒とし、多くの場合は個人としての自己が国家、社会の目的と情勢に対しての認識を指した。当時の知識人は自己が覚醒した状態と悟ると、いつも努力して、自己の自覚を表明するにとどまらず、全国同胞の覚醒も精一杯努力したのである。上述の二つの点から『黒潮』は自覚した人たちを以って全国平民を覚醒するため、力を尽すのように理解するのが間違いないであろう。『黒潮』は日本研究を取り扱う理由の説明「一面は彼らの荒唐無稽を反駁する、もう一面は我々の同胞を呼び覚ます、日本人の心が分かり、速く準備しよう」<sup>38</sup>もこの意を十分に表した。では『黒潮』が掲げた「自覚」はいったいどのような状態を指したのか、どのようにすればこの「自覚」状態を達成できるのか。『黒潮』が創刊された五四運動を背景にして『黒潮』の編集理念とかをあわせて考慮すると、この「自覚」は当時中国人が日本に対する認識を指すということが理解しがたくない。それに、この「自覚」状態を達成するため、四つのことを覚悟しなければならないと主張した。

#### 1 日本帝国主義の対華侵略という覚悟

『黒潮』はまず日本帝国主義が対華侵略という実質を覚悟して、適当に準備しようと呼びかけた。「日本は東洋和局を保全するのが西洋の勢力が東漸するのを杜絶し、大アジア主義を実行するためである。其の中国に対する解決方法は、快刀利剣で中国を滅亡するにすぎない。(中略)

<sup>34</sup> 歐陽軍喜『歴史與思想：中國現代史上的五四運動』（福州：福建教育出版社,2009）168.

<sup>35</sup> 蔡元培「劳工神聖」1918年11月16日北京中央公園における講演。

<sup>36</sup> 陳独秀「労働者底覚悟」『陳独秀著作選』（上海：上海人民出版社,1993）153.

<sup>37</sup> 同注5

<sup>38</sup> 同注29

読者諸君、中国人諸君まだ動かないのか？諸君、必ず思考して、其の後に善するのだ。」<sup>39</sup>。此処に、日本が中国を保全するのが、西洋勢力の東漸を防ぎ、大アジア主義を施行、中国を滅亡する野心を持っているということを明確に表した。実は、「二十一か条」を界にして、中国人が日本の中国侵略の企てがだんだん意識するようになったが、『黒潮』はこの侵略の実質を認識するうえ、適当な準備もするようと呼びかけた。この点から、この時期の知識人が、「二十一か条」の時の日本認識より一歩進んで、日本侵略に対する対策、解決方策も求めることが分かる。「日本は近来、極端の侵略主義を抱えて、我々が早く覚醒しないと、抵抗の方法を研究しないと、将来恐らく生活もできなくなるだろう」<sup>40</sup>。ここでは、さらに、日本侵略主義のことを覚醒しないと、対策を研究しないと、生活もできなくなるほどの危機感も強く感じられる。

日本侵略政策にたいする対策というと、『黒潮』編集者陸友白は次のように主張した。「(1) 工商絶交を堅持する (2) 全国各界各団体国民軍を組織して訓練する (3) 国民が衣食を節約して、救国貯金を従事する (4) ……兵器…… (5) 国内外を連絡する…… (6) 修好…… (7) 待ち伏せ……」<sup>41</sup>。これらの対策は、経済、軍事、外交の各面も含め、平民の立場から普通の民衆たちもできる対策で、当時に同感を持っていた人も少なくない。この平民の立場をとるのは一面が平民主義思潮の影響を受け、もう一面が当時の中国の所謂「政府の公僕らは信頼できない」からである。

## 2 日本国内の情勢の覚悟

『黒潮』は次に中国人が日本国の情勢も覚悟しようと唱えて日本国民の覚醒も促す。五四運動前後、日本国内でもちょうど「米騒動」や「大正デモクラシー」の風潮が盛り上がっていた時期で、『黒潮』はこれら風潮を意識して、中国人が日本のこの情勢を覚悟しようと力を入れた。

『黒潮』は日本の「米騒動」について、「米の輸入は、中国、印度、タイであるが、毎年千万石にすぎない、需要の量に相当の差がある。最近中国は輸出禁止なので、恐慌がますますひどくなった。日本近年の米騒動はいつでも、どこでもある、政党の勢力を加えると惨忍無道な禍根を残した。以上から、日本は人民の食問題において適当な政策がなし、軍事に備える食料においても、決して何の準備もないだろう。」<sup>42</sup>と非難した。日本「米騒動」の禍根が政党勢力によって残したというような認識、日本政党勢力にたいしての批判は『黒潮』終始一貫したのである。呂雲彪は「日本各界之生活近況」で「日本国民は其の帝政の下に苦しく困窮されて、自脱ができない、遅かれ早かれ平民組合の自決運動によって其の無道の政府を転覆する」<sup>43</sup>のよう

<sup>39</sup> 「日本人之支那解決論」『黒潮』1(1919),43.

<sup>40</sup> 劉奇「対於太平洋主義之討論」『黒潮』3(1919),6.

<sup>41</sup> 「山東問題之回顧」『黒潮』3(1919),4.

<sup>42</sup> 「日本無米之恐慌」『黒潮』2(1919),62.

<sup>43</sup> 呂雲彪「日本各界之生活近況」『黒潮』2(1919),64.

に、日本国民の覚悟を求めた。更に、姚存吾氏が自覚した東方人は日中両国の政治社会と生産の現状を掲示して、両国国民の徹底覚悟を促し、現在一切の暗黒勢力を努力して一掃すると主張した<sup>44</sup>。彼はこの日中両国の暗黒勢力は日中両国の軍閥、財閥、政閥だと指摘した。石葆貞氏は「憐れみ深い日本平民たち、あなたたちは日本国内でいくらかの苦痛を耐えているのか、小売をする人、人力車を引く人、クーリーをする人、彼らは全部あなたたちの兄弟たち、娼妓になって売春する醜業婦たちは全部あなたたちの姉妹で、あなたたちは毎日目で見えるあの軍閥らは、あなたたちと同じような両手両足の人間ではないのか、しっかり考えてみよ、なぜあなたたちはこの様子で、彼らはあの様子か」<sup>45</sup>のように、日本国内軍閥に対して批判するとともに、日本国民の覚醒も力尽くした。

『黒潮』は軍閥、財閥、政閥らのような暗黒勢力の圧迫から平民の自覚を促すのは、日中両国平民連合によって暗黒勢力を打倒することが狙っていたからである。『黒潮』はこの暗黒勢力の破産が可能だと主張した。「今次西洋大戦、ドイツの瓦解が強権主義者に絶大な教訓とした。日本はこれを覚悟したが、悟らない、引き続き其の暗黒思想を横行しているばかりで、将来の破産は予知できるのである」<sup>46</sup>。五四運動期においては、「強権が公理」という認識が流行っているが、『黒潮』は第一次世界大戦でドイツ帝国の瓦解が教訓として、日本は引き続き強権主義を横行したら、破産の日があると指摘した。

五四運動勃発した背景としてよく指摘されていた新文化運動の勃興にもなって、外来新知識、新思想が大量に流れ込み、クロポトキン『互助論』、社会主義思想、ジョン・デューイの実用主義哲学などが当時にとっても人気がある新思想として、広く反響を呼んだ。『黒潮』もこれらの新思想を受けながら、積極的に利用して日中両国問題の解決策を模索した。日中平民連合はこれらの新思想を利用して出した解決策の一つだとも言えるだろう。

戴季陶は社会主義思想を利用して日中平民連合によって日中問題を解決するように論述した。彼は日本の中国侵略の思想的根源を探り、その対外侵略的な性格は日本人固有の心理から生まれたものであると指摘した。「神権思想」の原始性及び後進性を批判した。彼はまた新世紀の潮流、貴族政治から平民政治に一変し、日本はまだ貴族軍閥で政権を握り、日本は力を尽くして北洋軍閥を支持するのは、直接に在華の勢力を拡張、間接に中国民治の精神を破壊するからであるという認識を持って、日中関係を改善するには、日本が「根本的に政治組織を改造し、伝統政策を廃除する」<sup>47</sup>べきだ。中国の国民は「日本の貴族、軍閥、党閥と親善を図れ」ず、「日本の平民の政治的社会的勝利を希望してやまない」。「世界的大改造事業」、即ち世界の平民とともに協力することでのみ完成できる社会革命のためには、洋の東西、人種の別を問わず、同志

<sup>44</sup> 姚存吾「対於太平洋主義之討論」『黒潮』2(1919),1.

<sup>45</sup> 石葆貞「随感録」『黒潮』3(1919),5.

<sup>46</sup> 「限制軍備中之日本陸海軍拡張計画」『黒潮』2(1919),86.

<sup>47</sup> 戴季陶「日本問題之過去與将来」『黒潮』3(1919),3.

の結合、同志の連絡が必要だと、日本人に呼びかけていた。<sup>48</sup>

この時期、クロポトキン『互助論』で唱えた「互助」も世の中の永遠不変の原理として人々の共感を得た。『黒潮』はこの「互助」の原理を受け、日中両国関係及び東アジア問題の解決を求めた。『黒潮』の中に「日本社会里面的怨声！恨声！泣声！」という文章が掲載してある。文章は日本社会の悲惨な情勢を分析して、「日本の現状、知的な面と生活の面からみると、覚悟しなければならぬ時代に迎えた。しかし、日本人はまだ恣意妄想で、徹底的な解決を求めない」<sup>49</sup>、その原因を追究すると、一つは知的宣伝、もう一つは生活の圧迫である。日本の文字獄が偶に出てきたが、「新思潮」は日増しに盛んになっていく。生活の圧迫はまさに日本人の覚醒を促すキーである。今の情勢なら、日本人は覚醒する日が遠くないと論述した。彼はこの文章を書くのも、国内の同胞たちは日本社会の状況を見通して、勇気を出し、その軍閥、財閥、政閥と戦い、全勝には望まないけど、間接的に日本平民の戦いを助力したいと願っていたのである。これは彼が言う「人間互助」である。編集者の陸友白は日本が侵略の野心を持つのも、日本国内の軍閥、官僚、浪人が自国地位の危険さを実感したためだとのように認識した。彼は「日中両国平民が真実な誠意を持って交流すれば、人間互助が世界不変の原理となれる」<sup>50</sup>と信じ、中国は原料が富んでいるので、輸出してもいい、日本は工業用品が大量に製造して、輸入してもいい、今、輸出禁止輸入拒否になったことも日中平民の生計に何も役に立たないと指摘して、両国平民の互助を訴えた。

### 3 先覚である西洋文明の覚悟

『黒潮』はまた西洋文明が先覚だと覚悟しようと唱えた。『黒潮』の中には東方人の責任として三つを挙げた。一つ目は西洋文明を根元から抜いてきて、照らさなかつたあるいは照らしても当たらなかつた東方人が目が醒めさせられる日がある。二つ目は徹底的に覚悟して、西洋の文明を消化吸収して、固有の文明を発展させる。三つ目は西洋文明と固有文明を照らし合わせて、新たな文明を独立的に創り出すと論述した<sup>51</sup>。此処にも西洋文明を持って自国の固有文明と結びついて新しい文明を創造する責任感があることが分かる。『黒潮』はまた我々は西洋人を誠心誠意に歓迎することも我々国民の自覚で、我々は西洋文明を使って、自国の固有文明の刷新、社会根本的な改造を図るつもりで、当然、国内の空気を一新することも西洋文明が更に根ざし

<sup>48</sup> 張玉萍『戴季陶と近代日本』法政大学出版局（2011）150—159.

<sup>49</sup> 馬伯援「日本社会里面的怨声！恨声！泣声！」2(1920),6—7.

<sup>50</sup> 夢飛「日本天産物不足之隱憂」1（1919），57.

<sup>51</sup> 『黒潮』第一卷第三号「對於太平洋主義之討論」姚存吾の「現在東方人的責任：一、徹底覺悟，消化西洋的文明，發展固有的文明。二、獨立創造結合西洋的文明與固有的文明，創造新文明。以期適合新環境，對付新生活，享受世界人類的真幸福。」と『黒潮』第一卷第一号「太平洋主義」の「我們東方人的責任第一、要把太平洋的熱流傳徧到秦皇島以外個地方，使大家受著便利。第二要把西洋的文明連根起蒂的掘他過來，使照不到光明或照而不到的東方人有個清醒的日子。」を参照。

やすくなるうえ、効果もアップできるのである<sup>52</sup>と述べた。『黒潮』はこのように積極的に西洋文明を吸収するのが西洋人が我々の先覚だからと主張したのである。

第一次世界大戦が終戦後、ヨーロッパ諸国文明が戦争によって大きな傷つけられて、国力も一時的に衰退の道に辿った。これに対して、アメリカが戦後一躍世界巨大な存在となった。特に、アメリカ大統領ウィルソンが出した戦後新たな国際秩序を構築するための十四か条の平和原則は世界各国に大きな影響をもたらした。その中の民族自決主義が植民地の各国に独立の希望を与えた。『黒潮』はアメリカについて「アメリカは世界強国として、西洋文明のリーダー、共和、先進、民治の橋渡しである」<sup>53</sup>と認識して、日本からの侵しを抵抗するなら、中国はアメリカと提携しなければならないと主張した。提携の方法としてとても重要な一つは西洋文明の輸入というのである。

『黒潮』は当時中国社会の革新、環境の改造、平民の建設、教育の解放、悪習の除去などを進行していると認めたが、進展が遅いと実感した。その進展に拍車をかけたために世界で完全な先覚者であるアメリカの助けとご指導が必要でなくてはならなかったと指摘した。<sup>54</sup>これからも当時の中国人はアメリカにたいする認識が分かる。アメリカの協力によって日本という中国にとって当時最大の脅威、もっとも侵略性を富んでいた隣邦を抵抗したいのである。『黒潮』のこのような認識は個人的な認識ではなく、多数の人たちがこういう立場を持っていたのである。これを通して当時中国人の立場もある程度に窺われる。勿論、このような民衆の動きも二十年代の中国は日本と連携する夢を徹底的に諦め、アメリカと正式に連合する道に辿る先見的な芽生えを養ったとも言えるだろう。

#### 4 日中親善の覚悟

『黒潮』はアメリカとの連合で日本侵略を抵抗するに止まらず、その主旨で掲げたように「日本研究」を通して東アジア問題の究極的な解決を求め、日中親善、東アジア最終の平和を実現することがその最終の目的である。<sup>55</sup>当時の民衆たちは日中親善についての傾向が『黒潮』の懸賞徴文から窺われる。

『黒潮』は「日中親善」をめぐる徴文活動が雑誌を創刊する前も始まって、その結果は「中日可親善否？」<sup>56</sup>と題して創刊号で掲載された。この徴文は全国各地ならびに日本東京から二百余りの応募文章を集めた。民衆参加の積極性、文章由来地の広さ、感嘆するほどである。これらの文章から当時中国人の対日態度もある程度に明らかになった。

---

<sup>52</sup> 姚存吾「對於太平洋主義之討論」『黒潮』2(1919),2.

<sup>53</sup> 欧陽孝純「對於太平洋主義之討論」『黒潮』2(1919),3.

<sup>54</sup> 同注 52

<sup>55</sup> 同注 29

<sup>56</sup> 「中日可親善否？」『黒潮』1(1919),14-19.

「中日が親善できるか」という論題をめぐる、応募者は明らかな両派に分かれる。一派は中日両国が親善できると考え、理由としては、人類が友愛、互いに助けという普遍人性を持ち、両国は唇齒の関係があり、両国の民衆は親善の本心を持ち、両国の民衆は軍閥を廃止、社会を革新する覚悟があるなどと主張した。もう一派は真っ向から中日は親善できない論調を持ち、理由は、両国の分際は不均等、利害が一致しない、立国の根本理念も違い、日本はとても危険な侵略主義を抱き、親善は空言で侵略事件が数え切れない、こんな急進な侵略主義は中国に不利などである。これらの原因から日中親善が難しいと思ったほうが大多数を占めたことがわかるが、日中親善、東アジアの平和は人々が追求している夢として示されたのである。

戴季陶は日中両国人民の親善と結合は両国が平等自由互助の社会革命成功した後、実現できると述べた。彼は両国人民の親善と結合を阻害するのが官僚、軍人、商人だけではなく、実に近代いろいろな罪悪を創り出した資本主義で、我々は反対するのは軍国主義であり、帝国主義であり、軍国主義と帝国主義の骨子としての資本主義であると指摘した。<sup>57</sup>社会革命によってこの資本主義を打倒できれば、両国の親善、東アジアの平和が夢ではないという戴季陶のような信念は当時には孤立的な存在ではなかった。邵光典も日中親善が東アジア平和の先導、世界平和の先声と指摘して、彼は公理自身が役割を果たさない、強力で擁護しなければならないが、目下日中両国の軍閥が公理の敵として、両国の平民たちがこの軍閥を打倒する覚悟をするべきで、この軍閥を打倒しないと、両国の親善はできないと論じた。<sup>58</sup>このように、当時の人たちは日中親善と東アジア平和を実現するためこつこつと研究、努力することがわかる。これも実は『黒潮』が日本研究を通して、ずっと求めるものである。『黒潮』が掲げた東アジア問題の根本解決も日中親善、東アジア平和の実現を願って、人類真の幸福を得たいのである。

## 結論

『黒潮』が創刊された1919年前後、中国では未曾有の変革が行われていた。1915年1月、日本の対華「二十一か条」が提出して、全国反日の勢力を呼び起こした。続いての西原借款とベルサイユ講和会議など連鎖的な事件が最後に五四運動に辿った。中国人がこの所謂「同文同種」の日本帝国を真剣に認識と研究を行わなければならなくなった。嘗ての日本留学生はさらに日本国内精細な「支那研究」に万感胸に迫った。『黒潮』はこの時期に誕生されたことが決して偶然とはいえないであろう。『黒潮』は専門的な「日本研究」雑誌を創ろうとして、その位置づけ及び編集出版の主旨からも、この時期の強い時代精神が国民たちに与えた国家や民族を關心する責任感が反映できる一方、国民たちが日本侵略の過程で、積極的に反抗、全力で前に邁進の使命感も表された。

『黒潮』は五四運動の最中において、独特の国別研究の視角を以って民国時期日本研究の新

<sup>57</sup> 戴季陶「資本主義下面的中日関係」1(1920),1-4.

<sup>58</sup> 邵光典「中日平民聴者」『黒潮』3(1919),2.

たな領域を切り開いて、民国時代初めて、ひいては中国初めての専門の日本研究雑誌となった。この「一つの国家問題研究—日本研究」という視点こそ『黒潮』雑誌の何よりの一つの顕著な特色とも言えるだろう。『黒潮』は平民の立場をとって全国平民対日公開的な言論研究機関の旗を掲げ、日本対華侵略の輿論の中で、中国平民としての声を出し、一面は当時中国人が日本を認識するため非常に豊富な知的資源を積み重ねた、もう一面はその国家、民族運命への関心という思考も多く包含され、とくに『黒潮』が掲げた日中親善、東アジア平和という究極的な出発点は『黒潮』の読者に大きな激励となった。『黒潮』のこの時代の責任感は当時広い反響を呼び起こした。『黒潮』第一巻第二号、第三号、第二巻第二号の中の「通訊」という読者の手紙を掲載するコラムからも分かるように、同誌のこの精神が当時人々の同情を買ったのである。

『黒潮』は民国時代日本研究雑誌の濫觴として、民国日本研究の大幕を開けた。同誌編集者、執筆者の多数が海外の帰国留学生として、日本侵略の危機に向かって、自ら冷静な覚醒に止まらず、積極的且つ自発的に日本を研究すると同時に、国民が日本を認識、研究することにも力を尽くした。彼らは国内同胞の覚醒に全力をあげるのみではなく、日本国内の情勢も十分な注意を払って、日本国民の覚醒も力を注いだのである。『黒潮』における日本研究は清末以来、日本を訳して紹介、時評などのカテゴリーから脱却して、日本の基本国情、対外政策、帝国侵略など多方面総合的な研究が行われるうえ、日中問題の解決方策も積極的に試みをした。執筆者たちの教育水準から見れば、『黒潮』の日本研究は少なくとも、当時わりと高いレベルに達したとも言えるだろう。勿論、その執筆者の出身、立場、教育背景などの要素により、文章はそれぞれの特色を呈しているのだが、『黒潮』は日本研究を通して日中親善、東アジアの平和を願い、人類真の幸福を得たいという願いは五四運動期中国知識人の時代使命感を反映する一方、雑誌のもっとも輝いているところとして注意を払わなければならない。